

国民同胞

感じ取らなければ分らないことがある
—「その努力を惜しんではならない」—

北村公一

S君へ

先日の会合で、君は「自分は学生の時から合宿教室に参加してゐるが、実のところ『天皇』といふ御存在について未だに自分で『これだ』と得心が行つてゐない」と話してくれましたね。自分をよく見つめた、正直な言葉だと思ひました。

何と答へたらいいのだろうかと私なりに思ひを巡らせて来ました。やはり天皇の御本質は「祈り」だと思います。しかしこのことを説明することは私には荷が重過ぎますし、また言葉だけで説明できることでもないやうに思ひますので、ここでは私自身の体験をお話しさせていただきまます。

平成七年一月に、私が住んでゐた神戸を阪神淡路大震災が襲ひました。

私の住んでゐた社宅も全壊したため、家を失つた悲しみ、避難生活のつら

着の身着のまま家内の実家に身を寄せました。多くの被災者が避難所暮しを余儀なくされたのに比べ、私たちは怪我もなく幸運でした。そんな中、天皇皇后両陛下が被災地を見舞つて下さつたのです。御所で摘まれた水仙の花束を焼け跡に供へられ、避難所になつてゐる体育館に足を進められました。

私はテレビで拝見したのですが、床に敷き詰めた布団や毛布の上に被災者が座つてお迎へする中に両陛下は分け入つて行かれ、お言葉をお掛けになります。両陛下の優しいお姿に手を合せて拝む老人、涙する人、つひには皇后陛下の御腕にとりすがつて号泣する婦人もありました。

その婦人はなぜそんなに激しく泣いたのでせう。地震の恐怖、家族や

発行所
社団法人 国民文化研究会
(九州←→東京←→全国)
東京都渋谷区東1-13-1-402
振替 00170-1-60507
電話 03-5468-6230
FAX 03-5468-1470

月刊「国民同胞」編集部
毎月一回10日発行
購読料 年間2000円

さ、今後の不安など、様々な思ひが一気に溢れ出たに違ひありません。当然のことながらそれらは恨みつらみとは違つてゐました。皇后陛下のお言葉や眼差しに接した時、その婦人は自分の苦しみを分つて頂けたと感じたのではないでせうか。幼子が母の胸に抱かれるやうに、安心しきつて、泣けたのでせう。私自身は避難所でお迎へした訳ではありませんが、私たちも含めて全ての被災者に寄せて下さつてゐることがよ

く分りました。
両陛下はそれから後も何度も兵庫県を行幸啓下さり、三年前には私たち県民は奉迎の提灯行列を行ひました。その日、ご宿泊のホテル前広場に二千人の提灯を手にした県民が参集し、両陛下のお出ましを待ちました。やがてお部屋の灯りが消され、両陛下がバルコニーに提灯を持って立たれました。

聖寿万歳の嵐、皆提灯を持った手を振り上げます。すると両陛下もこゝに合せて提灯を上下に振られるのです。しばらくして今度は両陛下が提灯を左右に振り始められました。我々もそれに合せて、提灯を左右に振ります。何とも美しい上下一和、君臣感應の光景ではないでせうか。

S君、勉強の成果をお聞きする日を楽しみにしてをります。

(平山直樹税理士事務所数へ四十三歳)

そして湧き起る国歌君が代の齊唱。私はこの時ほど、日本に生まれて良かったと思ったことはありません。これらの感動は陛下が常に国民の幸せを祈つてをられる、その大御心が私たちにも感じられることから起るのだと思ひます。感動は理屈ではありません。心と心が触れ合ふ無限の世界です。知識と理論は大事ですが、人間として生きて行く中で、もう一つ大事な感じ取る世界があることに気づいてほしいと思ひます。

S君は人の心が分るといふことに思ひを凝らしたことがありますか。何かを真剣に祈つたことがありますか。皇后陛下の御腕にとりすがつて号泣した婦人の胸中は感じ取ることでしか分りません。陛下のご日常は「国安かれ民安かれ」の祈りの日々です。そのことを御製やお言葉から拝察するわけですが、まさに感じ取らなければ分らない世界です。その感じ取らなければ分らない世界に近づくにはやはり努力が必要です。その努力を惜しんではなくないと思ひます。さうした中で、自づと天皇の御存在が見えてくると思ひます。

卒業おめでたう——「真心を尽す人に」

久保田 真

去る三月一日、三年間担任した生徒を卒業させた。商業科のクラスで三分の二是就職して実社会に出ていく生徒たちであり、この一年間、彼らに何を伝へようかといつも考へてきた。

左記の一文は、将来、いつの日にか読んでもらひたいと思つて卒業生に贈つたものである。この文章を書きながら、小田村寅二郎先生が御講演の中で「心を尽さずば日本人にあらず」と述べられた一節（国文研叢書27『學問・人生・祖国一小田村寅二郎選集』所収、「心を尽す人を』や、毎夏の合宿教室で「大学の違ひ、学年や文系理系の相違を超えて、互ひに心を尽して語り合つて欲しい」と開会の御挨拶をされたお言葉が思ひ起されてならないかった。先生のお姿をお偲びするたびに、戴いた学恩の大きさを改めて感じてゐる。

「真心を尽くす人に」

卒業おめでたう。三年間君たちの担任をして、思ひ出は尽きません。教員生活十七年目になりますが、一年から三年まで持ち上つて担任をし

たのは初めてだつたので、君たちとの日々は忘れられないものになりました。

入学の頃のやや緊張した、あどけない表情が昨日のことのやうに思ひ出されます。大学・専門学校への進学、あるいは就職と各自進路は違ひますが、それぞれの人生航路の中でも大きく舵をきる今、君たちは青年らしく、新たな決意に胸をふくらませてゐることと思ひます。

その一方で、何となく不安感も抱いてゐることと思ひます。

まづ、青年期特有の社会に向ふ不安があるでせう。これまで何度も言つてきたやうに、新しい仕事を覚える苦労、人間関係の苦労は誰にでも必ずあります。就職する人は、三年、最低でも一年は是非頑張つて下さい。周りの人は皆経験をしてゐることで書きました。入学試験や就職試験に赴くクラスメイトに激励の手紙を書いて渡してゐましたが、多くの生徒が勇氣づけられたと合格体験記に書いてゐました。また、冬休みに入つて教

室に生けておいた花を忘れたと思つて取りに戻つたら、なくなつてゐて、「あれっ」と思つたのですが、新学期には生き生きとした花が教卓に飾つてありました。誰か家で水をやつててくれたのです。今でも誰がしてくれたか分りませんが、学年が進むにつれて、クラスのまとまりを感じるやうになつたのはかういふことな

のか、一人一人の真心と創意工夫なることは避けられないでせう。しかし、断言します。日本は必ず復活します。さういふ底力が日本にはあると思つてゐましたし、三年間君たちと過し、今は確信に変りました。何度も話してきたやうに、日本経済や日本社会を支へてきたのは、現場の頑張りと工夫です。「自分の持ち場で気づき、工夫することが日本を支へてきたのだ、ボーッとするな」と何度も言つたと思ひます。そして、「誠実に生きなさい」と。

最近は、自分達で教室の掃除をしたり、折り紙などで飾つたりしてゐました。「誰か雑巾で棚を拭いてくれ」と言ふと、数人が出てきてやつてくれました。後ろの黒板に行事予定を書き、積極的に自発的に行動してきました。入学試験や就職試験に赴く人が見てゐようがゐまいが、誠心誠意、心を尽してきたのが日本人だつたのだと思ひます。日本人が一所懸命掃除をしてきたのはかういふことだつたのか、掃除をして自分の真心も磨いてきたのだとやうやく気づきました。

西欧諸国の侵略に対峙した、激動

の近代日本の先頭に立たれた明治天

皇に次のやうな御製があります。

いかならむ時にあふとも人はみなまことの道をふめとをしへよ

おそれりにふれたる(明治四十五年)

ほしのばれぬ時をしのびしのちにこそ人のまこともつらぬきにけれどもどんな時でも真心を貫いて生きていくことこそ大切だ、教師や親はそれを教へよといふことです。そしてまた、いやなことが目につきいろんな困難にぶち当ることの多い人間社会ですが、そんな人間社会で真心を通することは難しいことです。

その困難を忍んでこそ真心を貫けるはずだと詠まれてゐるのだと思ひます。大変意味の深いお歌です。そのためには僕らは心身ともに健康でなければなりません。私自身も日々心を新たにし、共に頑張って生きていきたいと思ひます。

◆

それでも落ち込むし、元気をなくすことがあるでせう。さうした時、頑張れる力はどこから來るのでせう。

「千円札」の野口英世と母、さらに恩師との関係を紹介します。

黄熱病の研究などで第一回のノーベル賞候補にもなった野口英世は、福島県の貧しい農家に生れ、一歳の時、開炉裏に落て、左手が握つたま

まで固まつてしまひました。小さいときから事あるごとにそれをタネにいぢめられ、小学校三年の時は朝家を出るけれども学校には行けなくなつてサボつてゐました。それを知つた母は自分を責めて泣きました、私が目を離したばかりにと。しかし母は心を鬼にして言ひます。「でもね、お前は手が使へなくても、頭ならい

くらでも使へるはずだよ。いぢめられた悔しかつたら、うんと勉強して、みんなを見返してやつたらいい。どうか辛抱して学校に行つておくれ。母さんも今まで以上に頑張るから」。

その後、英世は黄熱病患者の治療に当たります。その黄熱病にかかりアフリカ・ガーナで五十一歳で亡くなりますが、三十八歳の時、こういふ言葉を残してゐます。

「私の過去において、最も私を心配し、最も奮起させたのは母上です。将来における私の光明と勇氣も一に母の愛に負ふものです」

英世の人生を支へたものは母のひでした。そして、不遇ではあつたでせうが、恩師や医師との出会いから人生を歩んでいったのです。

直木賞作家、天童荒太は『悼む人』の中で、主人公にこう言はせてゐます。「人生の本質は死に方ではなくて、誰を愛し、誰に愛され、何をして人に感謝されたかにあるのではないか」。

また会ふ日を楽しみにしてゐます。また、努力していくことに対しても、次のやうな言葉を残してゐます。

「忍耐は辛し、されどその実は甘し」

(寺子屋モデル・三林浩行氏の講義から)

の大戦でも命がけで戦抜き、敗戦後は世界が驚くやうな高度経済成長を成し遂げたのです。君たちにも「母は近くにゐます。

心掛け次第で「心はいつでも元気にできます。大切なことは、プラス面もマイナス面も含めて、自分自身を好きになることです。

「最も幸福な状態を十点とするときには何点ですか?」

「今四点ですか?」

「それじゃ、あと何ができると合格点になるかな?」

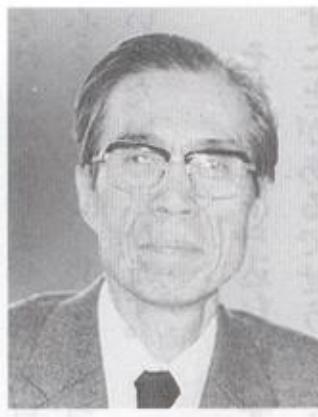
今自分がしなければならないことは何か、それはそれぞれの場所で創意工夫の努力を続けることだと思ひます。落ち込みさうになった時は、自らに鞭打ち、気持ちに張りのある充実した人生を送つて下さい。そこで初めて幸せに出会ふのです。

また会ふ日を楽しみにしてゐます。

君たちの将来が幸多きことを祈つてゐます。(平成二十二年三月一日)

(熊本県立菊池高校教諭数へ四十四歳)

追悼 元常務理事 山田輝彦先生



本会元常務理事の山田輝彦先生にはさる二月十九日、逝去。享年八十九歳。先生は大正十年、現在の北九州市若松区にお生れになり、旧制若松中学から、旧制佐賀高等学校に進まれ、同信会に入

会。高瀬伸一（昭和二十年七月戦死）、

小林国男、小柳陽太郎氏らの一年先輩に当る。昭和二十年、九州帝國大学法文学部国文学科を卒業。福岡県立若松高等学校教諭を経て、福岡教育大学教授。同大を昭和五十九年退官、その後中村学園大学、九州女子大学教授を歴任。

一方、国文研發足後は長らく常務理事として本会思想活動の中核を担はれ、毎夏の合宿教室では例年のやうに講義を担当された。深い思索と鋭い思想分析に基づく数々の御講義は、その根底を貫く祖国の再建を信じられる御心情と相俟つて、聞く者をして引き付けずにはおかないものがあつた。

先生は御著『明治の精神』の「はしがき」で、戦後思想に欠落してゐるものは「國」と「死」の問題であると指摘され、個人の欲望充足に奔る戦後の思想を「欲望自然主義」であると厳しく批判されてゐる。思想の濫れが価値観の多様化の名の下で愈々、増幅する今日、先生を喪つたことは限りなく悲しいものがある。

山田輝彦先生を偲びて

那須三元

私が山田輝彦先生に師事するために福岡教育大学中学課程国語科に転学したのは、昭和五十三年のことであつた。その二年前、熊本大学理学部に入学し、熊大信和会の学生寮「時習義塾」で学ばせていただいた

先生は大学でも戦つてをられた福教大の入学式を終へ早速山田先生の研究室を訪ねた日のことは、今でも鮮明に記憶してゐる。それまで

は合宿教室の壇上に立たれる先生を見上げるだけであつたが、初めて直

山田先生は、彼らが企画する講演会の講師を引き受けられ学内の講演会で度々お話をされてゐたやうである。入学して間もない頃であつたが、大学正門に山田先生の講演会を知らせる大看板が立てられた。このこと

へ送り出してくださつた方々や恩師に堪へない。先頃、先生の訃報に接して、改めて深き学恩に感謝を申し上げるとともに、福岡教育大学で山田先生のご指導を忝くした者として、思ひ起されることの一端を記させていただき先生のご冥福をお祈り申し上げたい。

私は山田輝彦先生に師事するため学部に入学し、熊大信和会の学生寮「時習義塾」で学ばせていただいたが、私が、将来の進路に迷ひ退学を決意した時、私の考へを聞き出しその漠然とした計画の無謀さを懇々と諭してくれださつたのは、折田豊生さんでした。そして、山田先生は、彼らが企画する講演会の講師を引き受けられ学内の講演会で度々お話をされてゐたやうである。入学して間もない頃であつたが、大学正門に山田先生の講演会を知らせる大看板が立てられた。このこと

は、暴力事件まで起つてゐた荒れた学内でご自分の立場を宣言されるに等しかつた。先生は、その講演の中

イスを頂き、大学一年・二年次に国文研の合宿教室でその聲咳に接してゐた山田輝彦先生のいらつしやる福岡教育大学に転学することとなつた。

私が入学した昭和五十三年当時、福教大はまだ過激な学生運動の余波なく、参照できないのが残念である。死亡事件まで起つてゐた。学生自治会は革マル派系の学生によつて私物化され、学生会館も学外の活動家によつて占拠されてゐた。私自身、バリケードの中に入つたため長時間詰められたり、私の安下宿の部屋にいきなり見知らぬ活動家風の男が二人飛び込んで来て私の素性を探つて行つたこともあつた。それに対し、日本青年協議会の学生組織であつた教員が居られようが居られまいが、いつも先生の研究室にお邪魔させていた

だくことになつた。

私は早速先生に手紙を差し上げ丁寧な御返事を頂戴したが、今手元に

寧な御返事を頂戴したが、今手元に

が残つてをり、以前には抗争による死亡事件まで起つてゐた。学生自治会は革マル派系の学生によつて私物化され、学生会館も学外の活動家によつて占拠されてゐた。私自身、バリケードの中に入つたため長時間詰められたり、私の安下宿の部屋にいきなり見知らぬ活動家風の男が二人飛び込んで来て私の素性を探つて行つたこともあつた。それに対し、日本青年協議会の学生組織であつた教員が居られようが居られまいが、いつも先生の研究室にお邪魔させていた

早くこの講演会が終つて欲しいと思った」といふ意味のことと冗談めかして話されたが、思想的対立も刺々しく厳しかった当時の大学においても、国文研における言論活動をそのまま展開され、大学正常化のために戦つてをられたのである。

一・二年次の時、私は九州大学・西南学院大学・福岡大学の信和会で学ばせて頂いたが、三年次の時、当時福岡県立高校教諭であつた小野吉宣さんが一年間福教大に留学され、「福教大信和会」として独自に活動するやうになつた。後輩として是松秀文君・脇元光法君・中園裕二君・太田和宏君の四名が入会し、そのうち私と是松君・脇元君の三名で大学の近くに部屋を借りて「明日香寮」の看板を掲げて共同生活を始める事になつたのは、昭和五十五年であった。開寮式の時には先生にも来ていただき、お祝ひしていただいたことは忘れられない思ひ出である。彼らと共に、北九州市若松区の先生のご自宅にお伺ひしたこともある。先生の研究室では、合宿教室の参加学生とともに短歌会を開いてご指導を受けたり、御多忙の中、時には「講孟余話」の輪読会にも参加していただいた。

先生のご指導で卒論は「漱石」に先生のご専門は近代文学・近代思想史、特に夏目漱石の研究であり、その方面的代表的な著作は「夏目漱石の文学」(桜楓社刊)である。ここには、「草枕」から「明暗」へ至るまでの漱石の代表作十編に関する論文が収められてゐる。先生は、論文のご執筆には夏休みを利用してゐたやうだが、八月は国文研の合宿教室と重複して、そこでのご講義の準備に多くの時間を割かれており、論文の完成には大変な苦労があつたやうだ。論文が漸く完成して筆を擱く時には解脱感のやうなものがある、と仰つたこともあつた。

先生のご研究の特徴は、漱石の文學を広く近代思想史上に位置づけ、ナショナリストとしての思想家の側面や、近代国家明治日本の持つてゐた奥深さを正当に評価された点であり、近代において倫理的に生きるとはどういふことか、を徹底的に追求した思想家として漱石を捉えてをられる点だと言へる。この様な漱石観はそれまでの漱石研究史上画期的な視点であり、漱石研究の世界でもつと取り上げられてよいものではないかと思はれる。

大学の先生のご講義では、一年次

に森鷗外、三年次に夏目漱石の作品を対象とした演習、同じく三年次に近代文学思想史の講義を受講させていただいた。また、三年次からは先生の研究室に所属し、卒業論文は夏目漱石の「文学論」をテーマに作成した。こちらの方面でも私はよい学生とは言へず、演習における発表にしても卒論にしても大変恥づかしいものであった。ただ、北村透谷や岩野泡鳴、夏目漱石などによる近代文學思想史のご講義の中で、形式に囚はれない人間の内心から自然に發する生命的なものの系譜を指摘されたことは、三十年を経た今でも強く印象に残つてゐる。

高木市之助先生に師事された先生
先生は、大学内でも研究以外の職務も多く、また福岡教育大学付属中学校の校長も勤められ、国旗や国歌の扱ひを初めとして様々な改革をなされた。また、火野葦平とも深い交友を持たれ、彼の自死の前、最後に会はれてゐる。

先生は九州帝国大学時代、高木市之助先生に師事され「万葉集」を研究された。お好きな歌として「振り仰けて若月見れば一目見し人の眉引き思ほゆるかも」(三五二)を挙げられたことがある。高木先生の論文に

は、先生が学生時代に踏査された成果が先生のお名前とともに引用されたものがある。内發的に躍動する人の精神を大切にされる先生の感覺は、「万葉集」に親しまれたご体験に負ふところが大きいのかもしれない。「綾にしき何をか惜しむ 惜しめかりせば ためらはば折りて花なただ君若き日を いざや折れ花よ」(佐藤春夫訳「車塵集」)卒業の時、先生が私たちに錢をしてお贈り下さった詩である。

学生時代以来、三十年余の長きに渡り指導を賜つた先生にあらためて感謝申しあげたい。

(福岡県立城南高校教諭数へ五十二歳)

山田輝彦先生の御遺詠

孫二人来る、「ぢぢばか」と人は

いふらむ(昭和六十二年八月)

言絶えていとしきものかうまごらは目を輝かせ蟬の殻とする

か抱けばもろ手重しも生れしよりは

やも三年は過ぎにけるかも

部屋ぬちの玩具の山にあにおとこ

けつまろびつ声あげ遊ぶ

祖父祖母につきせぬ思ひ残しつつけ

ふ帰りゆくうまご二人は

機首あげてひむがしへ行く飛行機の

また逢ふ日まで真幸くもあれ

(澤部通信)第八号から

山田輝彦先生の訃報に接して

折田 豊生

二月二十二日の夜、白濱裕児から山田輝彦先生が十九日に亡くなられたやうとの電話があった。翌日、国文研事務所からすでに御葬儀が終はつてゐる旨の電子メールが届き、それには、御遺族の御意向でお悔やみを遠慮するやうにとの添書きまであつた。先生が敬愛された森鷗外は「余ハ石見人森林太郎トシテ死セント欲ス」と言ひ遣し、一切の虚飾を排してこの世を去つたのであつたが、そのことをふと偲ばせる、先生らしい奥床しい訃報であつた。

小山田先生は、竹のやうなお方だつた。一見華奢で柔軟であられたが、しなやかで折れない強靭さを持つてをられたやうに思ふ。いつも物腰柔らかく、理路整然と想々と説かれるのが常であられたから、高校教諭であられた頃の日教組との熾烈な鬭ひの様を伺ふとき、そのやうな強烈な鬭志をどこに秘めてをられるのか、不思議にさへ思ふことがあつた。

先生は、我々の世代にとつては、最も大きな影響を受けた恩師のお一人であり、ことに國家観を学ぶに当

たつて、「内なる国家」といふ独特の御表現や明治の先達に対する深い敬仰の念を偲ばせるお心の籠もつたお言葉の数々を通して、その深甚なる御指導を仰いだのであつた。

先生が御専門とされた学問は近代文学であり、わが国の稀有の変革期を乗り越えて生きた先人の偉大にして複雑極まる生き様を綿密に辿られ、その精髓を御講義や御著作にお示し下さつたのであるが、それは単に先達の栄光をのみ教示するものではなく、その光と影を余すところなく探し、まさに人生の眞実に照らして歴史を顧みさせるものであつた。

先生は日頃、「僕の生き方の根底にあるものはニヒリズムです」と言つてをられた。御著書『明治の精神』の中のお言葉に、

（晩年の御詠草）
□ 平成十四年
天寿なほ尽きざる如しわが生のさいはての日々畏みて生く（六月二十六日）

長島秀男海軍技術中佐、寺尾博之海軍少尉の懇靈祭獻歌（八月十八日）
わが友のみ名を刻みし石碑は黙して立てり山のしじまに
逝きまして五十とせ余り七とせの月日は過ぎぬ夢のごとしも

亡き人の魂かとぞ見る秋めきしみそ

たつて、「内なる国家」といふ独特の御表現や明治の先達に対する深い敬仰の念を偲ばせるお心の籠もつたお言葉の数々を通して、その深甚なる御指導を仰いだのであつた。

先生が御専門とされた学問は近代文学であり、わが国の稀有の変革期を乗り越えて生きた先人の偉大にして複雑極まる生き様を綿密に辿られ、その精髓を御講義や御著作にお示し下さつたのであるが、それは単に先達の栄光をのみ教示するものではなく、その光と影を余すところなく探し、まさに人生の眞実に照らして歴史を顧みさせるものであつた。

先生は日頃、「僕の生き方の根底にあるものはニヒリズムです」と言つてをられた。御著書『明治の精神』の中のお言葉に、

（晩年の御詠草）
□ 平成十四年
天寿なほ尽きざる如しわが生のさいはての日々畏みて生く（六月二十六日）
長島秀男海軍技術中佐、寺尾博之海軍少尉の懇靈祭獻歌（八月十八日）
わが友のみ名を刻みし石碑は黙して立てり山のしじまに
逝きまして五十とせ余り七とせの月日は過ぎぬ夢のごとしも

亡き人の魂かとぞ見る秋めきしみそ
らに群れて赤蜻蛉とぶ
（十月五日）

によるべを摸索しつづける苦闘を身にしみて体験したとき、はじめて「天皇」の御存在の意味が納得できるのであらう」（二六〇—一六一頁）

すべて御自身の学問と人生と友情の御経験に裏打ちされた、切実にして奥行きの深いものであつた。時としてユーモラスであり、人生の機微を悟らしめ、安堵を誇り、救ひをすら覚えさせるそのお言葉に、我々はしばしば感嘆し、そのしみじみとした情意の世界に導かれて行くのであつた。

みちのくの友の歌あり肥の国の方の歌ありにぎはしきかな
ひと夏を庭いろどりし紅葉萎燃えつ
きて秋深まらんとす
耳たぶに手の平あてても聞くが性
となりけり老いにけらしも
新聞の訃報欄見て亡き人の逝きまし
し歳まづたしかむる
わが病さもあらばあれ友らみなま幸
くあれとたゞに祈らる

□平成十五年
雑詠(二月八日)
友らみなおのがつとめにいそしむを
病みてなすなきわが身かなしも
いねがたき浅き眠りに現はるる友ら
の面輪みなうら若き

すこやかにあり経し日々のわが歌は
きほひしらべありてなつかし
冬枯れの庭ひとところ華やぎてくれ
なる深く山茶花は咲く

温かき黄金色して橙はたわわに稔る
冬の日ざしに
ひしめきて寒氣夜空を過ぐるらし真
夜さめて聞く風の鳴る音
沈丁の蕾はいまだ固けれどはや来む
春のいそぎすらしも

関正臣さんを悼む(二月二十八日)

言絶えて悲しかりけり関さんのみこ
ゑ再び聞くよしもなし

神祭るきびしき日々を一すぢの信貫
きて逝きたまひしか
日本語の乱れつぶさに指摘して嘆き
たまひしことを忘れず
病みますとつゆ知らざりき亡き友の
稀有の一生を偲びやますも

さいはての地を行くごときわが生の
余命の日々を紅梅の咲く
沈丁の香りを嗅げばちちのみの父の
みことの逝きし日思ほゆ

さざめきて通学路ゆく少女らの頬美
しもすき透ること
道の辺に赤き衣着し地蔵尊誰が手向
くるや折々の花

命の全けむ人はどうたひたる倭建の
みうた悲しも
束の間は病苦忘れてよみふける短歌
通信の友の歌草

小柳陽太郎さん一時失神せるとか
りにしわれをゆるし給へや

（九月二十四日）
たのもべきくすしいませばしばらく
は静かに病やしなひたまへ

妹を思ふ(同日)
日をおかずハイビスカスは咲きにけ
り妹がめでゑしくれなゐの花

小田村寅一郎さんを偲びて(同日)
の唱歌浮び来いねがたき夜に

寺尾博之さんのみたまに(八月)
みそらゆく雲やうやくに秋めきてた
ま鎮めの日はめぐり來りぬ
「われらがマン・ツー・マン運動の
戦後史」—全国学生青年「合宿教室」
レポート(昭和三七年から二八年間)
の「はしがき」から—平成八年刊
—頒価九百円 送料二百十円—

（日本青年協議会発行）
「短歌のここころ」 平成八年刊

宝辺正久兄への返し(十一月)
神宮の紅葉の繪葉書目に沁みて明治
節てふ呼び名なつかし
ひとところ日ざし明るむ心持して石
蕗は咲く病院の庭
家政婦の作りてくれし素麺をひとり
すすれり秋の夕べを

わが生のさい果てにしてかへりみる
過ぎしはなべて夢にかも似る
わたまの前に(八月)
われはかく病みて老ゆれど君果てし
かの夏の日を忘れて思へや
年ごとのみたま鎮めも得も行かずな
りにしわれをゆるし給へや

小柳陽太郎さん一時失神せるとか
りにしわれをゆるし給へや

（九月二十四日）
たのもべきくすしいませばしばらく
は静かに病やしなひたまへ

妹を思ふ(同日)
日をおかずハイビスカスは咲きにけ
り妹がめでゑしくれなゐの花

小田村寅一郎さんを偲びて(同日)
の唱歌浮び来いねがたき夜に

山田輝彦先生 国文研関係御著書

(夜久正雄先生との御共著)

「短歌のあゆみ 続短歌のすすめ」(品切)

「明治の精神」—近代文学小論
昭和四十六年刊
「われらがマン・ツー・マン運動の
戦後史」—全国学生青年「合宿教室」
レポート(昭和三七年から二八年間)
の「はしがき」から—平成八年刊
—頒価九百円 送料二百十円—

たい。
有難き学びのえにしこだくの思
ひ出熱き涙となりゆく

(熊本市環境保全局数へ六十歳)

—折田豊生編集「短歌通信」第六十六
号(二月二十八日発行)「編集後記」—

（第三種郵便物認可）

神宮の紅葉の繪葉書目に沁みて明治
節てふ呼び名なつかし
ひとところ日ざし明るむ心持して石
蕗は咲く病院の庭
家政婦の作りてくれし素麺をひとり
すすれり秋の夕べを

厚木合宿への 参加者勧誘の呼び掛け

—山口秀範先輩の記念講演
に目が覚めた—

藤新成信

昨年五月三十日、私の母校福岡県立修猷館高校で行はれた創立記念日の記念講演に、(株)寺子屋モデル代表世話役社長の山口秀範先輩(本会常務理事)が登壇されました。現役の後輩生徒千二百名に対して、志を高く生きることの大切さを真っ正面から説かれました。当初予定されてゐた伊藤哲朗元警視総監(本会会員)が内閣危機管理監に就任されたため、伊藤先輩の要請で急遽、修猷館高校同期(昭和四十二年卒)の山口さんが代はられたのです。私は同窓会の役員として拝聴しましたが、生徒諸君の魂を揺さぶり心に灯をともすやうな素晴らしいお話をでした。

山口さんは、冒頭で十五年にも及んだ海外での生活を振り返りつつ日本がどのやうな国なのか、日本の誇りとは何なのかを考へ続ける日々だったと回顧して、グローバルスタンダードに惑はされてはならないと生徒の胸の中に入つて行かれました。

その力強いお話には私も感動しました。そして伊藤内閣危機管理監から託されたメッセージを紹介して、「公と私」といふ人生上の大好きな課題について語られました。メッセージには吉田松陰「士規七則」の一節、「凡そ生まれて人たらば、宜しく人の禽獸に異なる所以を知るべし」が引かれており、鳥や獸は自分の生命を保持し、自分の子孫を残すことが生きる全てだが、人間はそれだけではなくはずでせうと問題を投げかけたのです。そのほか殉職した宮本邦彦警部の生涯をたどりながら「より高くより良く生きる」ことの尊さを生徒たちに熱く語りかけたお話をしました。

私は講演を聞きながら、高校時代の恩師小柳陽太郎先生(本会副会長)から頂いた学恩に、山口さんはご自身の人生をかけて応へてをられるのだと実感させられて襟を正さしめられました。山口さんは、かつて高校時代、教室の中だけでなく先生の自宅をも「学び舎」として、十余名の仲間と古典を輪読して、そこから汲めども尽きぬ学問の喜びを感じ取った思ひ出も語られましたが、一緒に先生の門を叩いた友、つまり学問を通して結ばれた友との友情が現在の山口さんの志を支へてゐることを

語つてゐたやうに思はれました。かうした友情の世界は、修猷館のOBであるなしにかかはらず、日本人として立派に生きようと発起して若き日に合宿教室に参加した皆さんを感じてゐるはずです。合宿教室を機縁にして、共に学んで来た私どもは、例外なく沢山の学恩と友情に恵まれてきました。かつて合宿教室と言へば、「学問・人生・祖国」といふいはずでせうと問題を投げかけたのが、いはすでせうと問題を投げかけたのです。そのほか殉職した宮本邦彦警部の生涯をたどりながら「より高くより良く生きる」ことの尊さを生徒たちに熱く語りかけたお話をしました。

私は講演を聞きながら、高校時代の恩師小柳陽太郎先生(本会副会長)から頂いた学恩に、山口さんはご自身の人生をかけて応へてをられるのだと実感させられて襟を正さしめられました。山口さんは、かつて高校時代、教室の中だけでなく先生の自宅をも「学び舎」として、十余名の仲間と古典を輪読して、そこから汲めども尽きぬ学問の喜びを感じ取った思ひ出も語られましたが、一緒に先生の門を叩いた友、つまり学問を通して結ばれた友との友情が現在の山口さんの志を支へてゐることを

りませんか。小田村寅二郎先生がいつも仰つてゐたマン・ツー・マンが活動の原点であるとのお言葉が甦つて参ります。

山口さんの講演は眠つてゐた私の目を覚させてくれました。

平成二十一年五月一日

追記 山口さんの「記念講演録」をご希望の方には国文研を通してご連絡下さい。私の方からお送りします。

(日章工業(株)代表取締役社長数へ五十歳

第五十四回全国学生青年合宿教室

この夏、厚木で学ぼう!

—先人はどう生きて来たのか

私たちはどう生きるべきか?—

招聘講師に

長谷川三千子先生

ペマ・ギヤルボ先生

八月二十日(木)~二十三日(日)

厚木市立七沢自然ふれあいセンター

編集後記 「常若のいのちの泉湧く國となさばや友ら力合せて」のお歌は、平成十年正月、山田輝彦先生からの賀状に記されてゐたもの。私事ながら同月末に上梓した拙著「深い泉の國」の文化学の最終校正中で、先生のお歌に励まされた感じがして有難かった。「國のあり方」を問ひ続けられた先生は、また人間の内面を常に見据えてをられた。合宿教室での御講義からは若い世代への信頼のお気持ちが伝はつてくるやうで、聽講する我らが伝はつてくるやうで、聽講する我らをいつも温かく後押しして下さった。那須三元、折田豊生両兄の追悼文に、改めて先生を仰ぎ見る思ひがする。(山内)